

良い音委員会・“生録会”奮闘記

一般社団法人 日本オーディオ協会

会長 校條 亮治 (生録会担当)

はじめに

先ず、初めに読者の皆さまには少しご説明が必要と思います。“生録会”奮闘記なるものを何故、私が書くことになっているかの経緯をご説明しなければなりません。さらには何故、私が直接“生録会”を担当しているかを知ってもらわねば奮闘記の意味がありません。また、若い方々からすれば今時“生録会”と言っても理解頂けない方々もおられるのではないのでしょうか。

■ “生録会”の所以 (ゆえん)

少し古い話ですがそもそも、オーディオ興隆期において音源は貴重であり、皆が皆、レコードを買える訳では有りませんでした。多くは友達同士での貸し借り、さらにそれをダビングするなどでした。ましてや「ライブ演奏会」などは地方在住者では殆ど高嶺の花であったと思います。一方、各地で FM 放送がスタートしてからは専ら「エアチェック (放送を録音すること)」が主流となってきました。その様な中「デッキ」と言われるレコーダーが普及し、オープンデッキ、カセットデッキの全盛時代が到来します。それに呼応するようにハードメーカーによる“録音講習会”なるイベントが開催されるに至り、メーカー主催の「ライブ演奏会」を録音するイベントも多く開催されました。これがいわゆる“生録会”の所以です。私も若いころに何度もその下働きをさせられたことを思い出します。その当時の“生録会”は現在のように各自マイクによる個別録音というより、主催者側のマイクセッティングにより、録音者にはライン分配が基本であったと思います。それは受講者が多かったことや、ハード機器メーカーの主催であったからだと思います。勿論、一部には大型オープンデッキによる個別マイク録音もありましたが多くはなかったと思います。

■ “生録会”復活の狼煙 (のろし) を上げる。

さて、日本オーディオ協会もオーディオ華やかなりし時代には“ライブ録音会”や“録音コンテスト”などを「オーディオフェア」に合わせて実施したときもありましたが、CD などの豊富な音源の登場と共に廃れてしまいました。私が 2008 年に日本オーディオ協会に関わると同時にあることに興味を持つ事になりました。それは、市場に出回っていたポータブル録音機 (通称 IC レコーダー) の音が非常に悪いことに気がついたことです。それらは基本的には音楽録音用ではなく、会議・会話録音用であったから当然とも云えます。予ては私も会議などで活用していましたが、いずれこれらは音楽用にもなるなと感じていました。その兆候として、一部の機種には PCM 技術や DSD 技術が搭載されつつありました。国内出荷台数も市場撤退企業もあり 75 万台程度しかありませんでしたが、国内オーディオ市場低迷の中で何とかオーディオ復活の突破口を作る必要もあり、この市場を倍増させようと考えました。つまり、PCM 技術や DSD 技術搭載による「音

「音楽専用ポータブル録音機」市場の構築です。音楽専用とはいえ当然、会議・会話録音にも十分機能するものであることは言うまでもありません。これらで市場規模を150万台まで持ち上げようと考えました。この取り組みは一方で、オーディオに必要な“良い音＝良い音源”開発の啓発につなげようというものでした。また、ライブ会場でのいわゆる“盗み録り”を撲滅し、ライブ演奏会での正規な“生録市場”作りを目指したものでした。これに向けて非会員企業であったオリンパス工業やコルグ、ローランド、ズーム、三洋電機等の企業を説明して廻りました。歩調を合わせるために日本レコード協会、スタジオ協会にも声をかけましたが、あまり色よい返事は頂けませんでした。これは、録音＝ただ録りと思われていたことの影響と思われる。本来は正規市場を立ち上げないから裏市場が出来るのだと今でも確信しています。この点ではその後、ライブ会場で即、録音したCDを帰りには即売するというビジネスが立ち上がりました。結果的に機器メーカーには賛意を頂き、横浜パシフィコでの“生録会”復活の狼煙を上げたのです。

■ 企画に知恵を絞る。

この時の演奏者は、日頃聴くことができない音楽として“アフリカンパーカッション・アンサンブル”、サキソフォン5人組の“サキソ5”を招いて開催しました。マニアの人達は結構しぶとく生き残っていましたね。すごいマイク持参で駆けつけましたが、ビギナーの人達への啓発としても電通大などへの働きかけで団体参加してくれたことは嬉しかったですね。勿論機器メーカーには参加企業から録音機の貸し出し依頼、指導要請など大わらわでしたが。

昔と違って全て“直録り”ですからステージ前にはマイクが一斉に並ぶという異様な光景でしたね。この活動は“音展”コンサートの生録会として6年間継続して開催してきました。

もう一つの“生録会”はマニア向けに“かぶりつき生録会”として「松本記念音楽迎賓館」様とタイアップして「“良い音”を本気で録る」と銘打ち、人数限定（MAX25人）で企画しました。こちらは、石田善之先生に監修をお願いし、タスカム等メーカーエンジニアの指導を仰ぎつつ行うものですが、一方で「志ある演奏家を世に送り出す」ことを目標に若手演奏家を招いて開催してきました。演奏家発掘では「松本記念音楽迎賓館」館長の横田氏には大変なお世話になっています。本当にかぶりつき録音ですので、目の前の演奏を聴きながらなのでかなり際どい録音となり、コンサート会場やCDでは聴くことがない音を録ることになります。

例えばバイオリン独奏の生録は“弓が切れる瞬間”や、普通は聞こえない“弦のこすれる音”（普通聴くバイオリンの音ではない）まで録ることになります。これ等も機器の技術が進化してきたから実現できたことです。この様にオーディオの幅を広げるために機器メーカーの御支援と共に、音楽之友社（岩出氏）の支援により今日に至り、今回は記念すべき「第10回・生録会」を迎えました。

これ等の想いを達成するまでは自らが担当するしかないと今日に至ったわけです。因みに2014 歴年のポータブル録音機の国内出荷台数は、お陰様で172万台（122億円）まで成長し、この殆どがPCM対応となりました。紆余曲折はありましたが、初期の目標はある意味では達成できたと思えますし、現在は「ハイレゾ・オーディオ」導入により、さらに新しいステージに入ったと言えます。

■ 「第10回松本記念音楽迎賓館」録音会

日本オーディオ協会「良い音委員会」は去る7月12日(日)に「第10回松本記念音楽迎賓館録音会」を開催しました。先ず「松本記念音楽迎賓館」をご説明しましょう。ここは「パイオニア(株)」の創業者である松本望氏の邸宅でありましたが、2001年に財団法人・音楽鑑賞教育振興会が譲り受け、現在は演奏会、オーディオ試聴研究、映画やドラマの撮影など幅広く活用されています。とても都心とは思えない静寂と気品あるたたずまいで、著名な茶室や散策路を配した庭園を備え、内部は総杉づくりの演奏ホール、高級オーディオ試聴ルーム、ゲストルーム、展示室、談話室などを備えています。所蔵品もベーゼンドルファーのピアノ、小型パイプオルガン、著名チェンバロ、歴史的価値のある蓄音器、オルゴール、SPレコードなど氏が生前所有していたコレクションも寄贈展示されています。近くには「ピアノのプーニン氏」が住んでおり、“こけら落とし”の演奏会出演以外にも、たまに練習を兼ねて来ているようです。

日本オーディオ協会は友好提携を頂いており、総杉づくりのAホール(定員35名)を使用しての“生録会”を過去4回開催してきました。これまで、バイオリンとピアノによる協奏、パイプオルガン演奏、チェンバロ独奏などを録ってきました。特に弦楽器の響きは暖かく非常に心地良い音がすると云われています。

■ 企画の立案

本生録会は組織変更(旧生録普及委員会改め、良い音委員会)された良い音委員会・音源開発WGとネットワークオーディオ委員会ハイレゾWGの合同で開催されたものです。特に“音源開発WG”は従来の生録普及を改め、良い音音源開発を目標に設置された組織であり、その初回業務に今回の生録会を位置付けました。従ってそのミッションから今回の生録は「ハイレゾ録音」に拘る形で企画されました。録音については以下の企画内容としました。

<録音規格フォーマット>

1. 192kHz/24Bit (PCM)
2. 96kHz/24Bit (PCM)
3. 44.1kHz/16Bit (PCM) (比較参考用)
4. 2.8MHz・DSD

<使用機材>

1. マイクロフォン：SONY プロトタイプ (100kHz マイク) ×2台
2. DSD用マイクroフォン：SONY C-800×2台
3. PCMレコーダー：TASCAM DA-3000×4台
4. PCMレコーダー：SONY PCM-D100

<録音&マスタリング>

1. ワンポイント録音
2. ノンマスタリング

■ 堀 彩也香のチェロ演奏

今回は、生録会ファンの期待に応えて、チェロ奏者の堀彩也香さんをお迎えしてのコンサートです。堀さんはプロフィールにもあるようにご両親も音楽家です。特にお父様もチェロ奏者であり、既に親子でのデュオ演奏 CD も出されています。ご自身は多忙な演奏活動をされており、1年越しのラブコールが実ったものです。この程度の広さで且つ総杉張りホールのコンサートとして、チェロは打って付けの企画になると自負もして取り組みました。特に横田堯館長には堀さんの口説き落としと会場押さえと大変なお世話になりました。また、伴奏者にはピアノの山崎早登美さんをお迎えし、期待通り息の合った演奏がなされました。

<堀 沙也香プロフィール>

東京音楽大学付属高等学校、同大学を卒業。在学中7年間、特待生奨学金を受ける。松波恵子、岩崎両両に師事。第76回読売新人演奏会に出演。その後、桐朋学園大学院大学にてさらに研鑽を積む。在学中、桐朋アカデミー・オーケストラとコンチェルトを共演。NHK-FM リサイタル、毎日新聞主催小児がん制圧チャリティーコンサート、山陽放送チャリティーコンサートなど数々の演奏会に出演。沖縄国際音楽祭、シュラーン国際音楽祭、京都国際音楽生フェスティバル、別府アルゲリッチ音楽祭などにも参加している。2013年、父・堀了介氏と初のデュオ CD『花のワルツ』をリリース。

<山崎 早登美プロフィール>

東京芸術大学附属音楽高等学校、同大学を経て、同大学大学院修了。これまでにピアノを白石朋子、水田香、植田克己、クラウド・シルデの各氏に、室内楽を岡山潔、植田克己、田中千香士の各氏に師事。第67回日本音楽コンクール入選、第15回大曲新人演奏会グランプリほかコンクール受賞多数。第9回、第14回日本演奏家コンクールにて、伴奏者賞を受賞。また、浜松国際管楽器アカデミーなど各種音楽祭、講習会等で公式伴奏者を務めるほか、国内外のアーティストとの共演や新曲の初演など、多岐にわたり活動している。現在、東京音楽大学弦楽科非常勤講師（伴奏・室内楽）

■ 猛暑日の演奏と録音

演奏曲目は堀さんの選曲によるものです。生録会に参加される方々の属性をある程度考慮して検討を頂きました。一方で、「ハイレゾ音源」として販売したときのお客様の要望も考慮して打ち合わせを行いました。従って皆様の良くご存じの楽曲が多く入っていると思います。

<演奏曲目>

- (1) R・シュトラウス：チェロソナタより第一楽章（9分30秒）
- (2) マスカーニ：カヴァレリア・ルスティカーナより間奏曲（3分30秒）
- (3) ピアソラ：アヴェマリア（4分）
- (4) フォーレ：エレジー（6分）
- (5) エルガー：愛の挨拶（2分30秒）

- (6) サン・サーンス：アレグロ アパッショナート (4分)
- (7) メンデルゾーン：無言歌 (4分)
- (8) ショパン：ノクターン 作品 9-2 (4分)
- (9) カサド：親愛なる言葉 (5分)



リバーサル風景

■ ノンマスタリング前提のマスター録音

さて、実際の演奏と録音状況ですが、まずは楽器と演奏者位置の配置設定です。広いステージではないので大きく振る訳には行きません。またピアノ伴奏者の山崎さんとチェロ奏者の堀さんが目を合わせられることが重要なポイントとなります。特にピアノの山崎さんからは堀さんの弓の動きが見えることが伴奏者の演奏のコツとなります。マイキングはリハーサル時から「カット & トライ」で設定と微調整を繰り返しました。

特に問題点は、伴奏ピアノとチェロを極めて近いポイントからワンポイントで録ることの難しさでした。メインのチェロとピアノのバランスが崩れることにはこの他、気を使いました。そして繊細音まで録りたいことと、演奏者の動きがノイズとして録音されてしまう難しさもありました。しかし、これらは全て「ハイレゾ録音」に拘ることでチャレンジしました。

もう一つの課題は暑さとの戦いでした。堀さんは写真を見て頂いても判るように華奢な方ですが、全身を使ってのかなりエネルギッシュな演奏をしてくれます。当日は猛暑日であり、エアコンをフルに入れておいて演奏に入る前で止めるという、嘘のような対応をしました。エアコンは静寂タイプで演奏ホール用になっていますが、100kHz マイクでしかもワンポイント録音をやるというかなり際どい録音ですので、エアコンは止めるという対応をしました。「堀さん、本当にごめんなさいご迷惑をお掛けしました。」

録音室はホール隣設の控室を使うことになり、当然エアコンは効いていますが、私は Cue を出す立場からホールにいて演奏と演奏者状況を把握しながらの進行となりました。

余談になりますが、先ずエアコンを止めると湿度が上がリ、チェロの音が微妙に変化します。従って、楽曲終了ごとに止めたエアコンを入れ、フルで冷やしてまた止めるという最新「ハイレゾ録音」なのに誠にアナログチックな対応で苦労しました。そして、100kHz マイクでの至近録音ですので演奏者の衣擦れの音や、ピアノ奏者の移動するときの椅子のきしみ音、スコアをめくる音など全てを録音しました。冒頭で述べましたが、以前、至近距離でバイオリンの生録を行い

ましたが、弓と弦がこすれる“ス～カ、ス～カ”という音は絶対に普通の CD では聞こえません。私たちは“生演奏”を“在りのまま”録音すること“途中で手を加えない”が「良い音」の入り口と考えています。勿論それには“良い音の楽器”“上手い演奏者”“良い音の会場”が重要であることは言うまでもありませんが、現在の録音とミキシングは手を加えすぎることが多いのではないかと考えています。何より「ハイレゾ録音」で重要なことは極力“手を加えない”ことではないかと考えました。また、マスター録音された音源は、通常は「マスタリング」工程を経ますが、一切手を加えないということは「ノンマスタリング」つまりは「マスター録音」そのものを「ハイレゾ録音音源」として世に送り出すことにしました。“衣擦れ音”も“椅子のきしみ音”も全てが“生の演奏風景”をそのまま「切り取る」ことに徹しようと考えました。

■ 汗だく必至の生録会本番

今回の生録会は朝からのリハーサル、午前中の「マスター録音」と午後「生録会本番」を一日で一気にやろうという無謀なスケジュールです。さらにはこの中でジャケ写真までとり、最後に「生録ファンと演奏者の集い」という懇親会までセットする、とんでもないハードスケジュールなものです。我ながら良くこんな無茶をお願いしたものだと思心するやら反省するやら、やはり「堀さん、山崎さんごめんなさい！」ですね。

午前中のマスター録音は、楽曲ごとに一呼吸入れられますが、午後の「本番生録会」はそうはいきません。演奏中のエアコンは止め、楽曲間はエアコンを入れ冷やしましたが、時間が足りません。演奏者の堀さんの顔からは汗が噴き出すし、疲れがたまりだすのが見て取れました。特に当日は猛暑日であり、且つ会場は満員（25人+関係者）ですからなおさら暑くなります。ステージ前部（と言ってもほとんどかぶりつき状態）にはマイクが林立し、さらに一人で二台も同時録音する強者まで出る状況でした。ファンとなると暑さもなんのその、の勢いでした。私は本来MC担当ではありませんが、前日のセッティングから予想も出来ていたので、急遽私がMCを担当し、堀さんの休憩時間（曲間）を作らざるを得ない状況となり、にわか仕込みのキャストトークとして何とか合間を埋めながら冷ややす時間を確保するという、冷や冷やの生録会でした。横田館長の団扇であおる場面まで出現しましたが、ファンの皆さんも良く分って頂いて演奏者と生録者が極めて近い空間で一体化出来、逆に非常に良かったと思います。



生録会の様子（写真左の一番左が石田 善之氏、その隣がMCを努める筆者）

生録会で重要なことは時間配分と時間厳守です。何故かといえば皆さんメモリーをプログラム時間通りにセットアップしているからです。時間超過してメモリー入れ替えになれば全ての生録がオジャンです。勿論昨今のメモリーは大容量であり余裕は持っていますが、時間厳守は絶対です。ここがライブ録音の難しいところです。そこへ行くと「マスター録音」は後から編集しますのでぶつ切れでも良いわけです。



録音中の石田 善之氏（中央）



録音中の参加者の様子

■ 盛り上がったファンの集い

ハードスケジュールの中で「ファンの集い」も重要なイベントです。堀さんは既に CD も出されていますが、あまり自分を押し出す方でもなさそうでした。やはり育ちでしょうか。私たちに堀さんを押し出す役割も担っていますので、「ファンの集い」での堀さんの人となりを見て頂きファンになって頂かねばなりません。こちらはゲストルームで岩出さんの司会で始まり、石田先生の総括と乾杯を頂きスタートしました。この機会にと、生録会仲間の方々の腕自慢や懇親あり、堀さん、山崎さんを囲んでの記念写真撮影ありの和やかで、且つ盛り上がった懇親会となりました。特に、音楽之友社の川村ご夫妻（カメラマン）には随分お世話になりました。勿論スタッフも全員参加の催しとなりました。会場では次はいつやるのかとか、出し物はこれだとか大いに話に花が咲きました。

でも、“夏の生録会だけはやめよう”と誓った私でした。



懇親会の様子

なお、この音源は本年度“音展”での活用と「配信オーディオ・ハイレゾ音源」として販売をする予定です。

<発売予定日：10月19日>

最後にお世話になりましたスタッフ皆様の一覧を掲載して御礼と代えさせていただきます。

■ 生録会スタッフ一覧

石田 善之（総監修・レコーディングエンジニア）フリー評論家

橋本 高明（レコーディングエンジニア）JAS 良い音委員会

加藤 丈和（アシスタントレコーディングエンジニア）JAS 良い音委員会

黒澤 拓（アシスタントプロデューサー）JAS ネットワークオーディオ委員会

佐藤 えりさ（アシスタントレコーディングエンジニア）JAS 良い音委員会

横田 堯（ホールコントロール）松本記念音楽迎賓館

岩出 和美（デザイン・フォトプロデューサー）音楽乃友社

川村 容一（フォトグラファー）音楽乃友社

鈴木 信司（オーディオエンジニア）JAS ネットワークオーディオ委員会

末永 信一（オーディオエンジニア）JAS ネットワークオーディオ委員会

照井 和彦（アシスタント）JAS ネットワークオーディオ委員会

村松 俊二（アシスタントフォトグラファー）JAS 良い音委員会

校條 亮治（チーフプロデューサー）JAS 良い音委員会・JAS 会長